

アメリカのケーブルテレビ
——プログラム・サービスについて——

(3) C-SPAN

井 上 宏

Cable Television in America
—— Program Services ——

(3) C-SPAN

Abstract

This paper examines C-SPAN (Cable-Satellite Public Affairs Network), which is one of the cable network in the U.S. At present, two channels of C-SPAN are working for the purpose of telecasting the House of Representatives and The Senate. C-SPAN began with the airing of plenary sessions of the House of Representatives and afterward it was supplemented with congressional committee and subcommittee hearings. Today C-SPAN is covering a wide variety of other events in public affairs. In a democratic society, it is indispensable to make known to the public the discussions in Congress. The journalistic activities of mass media have been playing a role in this type of reporting. However, a different type of journalism has also appeared which is devoted to unedited, "gavel-to-gavel", commentary-free coverage of public affairs. This is what C-SPAN itself calls "alternative journalism". In Japan we have no networks like C-SPAN. Here I consider the social significance of C-SPAN, by examining its objectives, its management, and its programming.

Key words: American cable TV, C-SPAN, TV journalism, Congress report, global journalism, call-in program, video archives

抄 録

アメリカのケーブルネットワークの一つである C-SPAN (Cable-Satellite Public Affairs Network) について論じる。現在、下院議会と上院議会とを対象にして2チャンネルの C-SPAN が運用されている。議会の本会議の中継からスタートして、議会の諸委員会を取り上げ、今日ではその他のパブリック・アフェアーズを広くカバーしている。

民主主義社会では、国会が真に討論の場になり、審議の様相が広く国民に知られることが不可欠である。マスメディアのジャーナリズム活動がその役割を担ってきたのであるが、「編集なし、解説なし」「初めから終りまで」を編集方針とする、これまでとは違った「オルターナティブ(もう一つの)・ジャーナリズム」と言われるものが現われた。つまり C-SPAN の登場である。日本では、未だ存在しないチャンネルである。どんな狙いをもって設立され、どんな運営の仕方、どんな番組編成をしているのかについて検討し、その存在意義について考える。

キーワード: アメリカのケーブルテレビ, C-SPAN, テレビ・ジャーナリズム, 議会報道, グローバル・ジャーナリズム, コール・イン番組, 映像アーカイブズ

- 1) はじめに
- 2) C-SPAN を視聴して
- 3) C-SPAN の設立
- 4) C-SPAN の運営
- 5) 編成方針と番組
- 6) C-SPAN のオーディオ・サービス
- 7) C-SPAN と教育
- 8) 番組の記録保存
- 9) 他国への広がり……イギリスの場合
- 10) C-SPAN の特徴

1) はじめに

C-SPAN とは、Cable-Satellite Public Affairs Network の略で、アメリカのケーブルテレビネットワークの一つである。その名のごとく、公共問題を専門に取り上げ、通信衛星を経由して、ケーブルテレビの加入世帯に配信をしているネットワークのことである。特に、連邦議会の下院と上院の審議を中継するネットワークとして有名である。日本では、未だ存在しないチャンネルであるが、アメリカの C-SPAN に学んで、日本でも「国会中継専門テレビ局」を作ろうとする動きがある。

1990年に日本の国会は、開設百周年を迎え、それを機に衆参両院の中において、リモートコントロールカメラで中継する実験放送を行った。国会改革案の一つとして、国会内で検討が始まったのと並行して、株式会社 C-NET が設立され、この C-NET がアメリカの C-SPAN のような事業の展開を目指している。C-NET は、C-SPAN の日本での総代理店の契約を交わし、既に実行可能なところから事業活動を行っている。アメリカ議会の審議映像に翻訳を付けビデオカセットにして販売したり、独自に取材した日本の国会映像を C-SPAN に流すなどの活動を展開している¹⁾。

民主主義社会では、国会が真に討論の場になり、そこで問題が明らかにされ、その審議の様子が国民に広く知られるということが不可欠なのであるが、日本の国会審議は、なぜか討論の場にならず、単なる質疑応答ないしは承認のためのセレモニーとなってしまうがちである。「強行採決」「審議拒否」の場面が余りにも多く、大事なことは公開の討論を経て決まるのではなく、国会の外で、いわば「密室」の交渉で片がつけられてしまう印象を受ける。こうした国会にテレビを導入し、国会の様相がいつも国民に「見える」ようにすることによって、国会審議のありようを変えていくことが出来るのではないだろうか。日本人は話すこと、討論することが苦手で、アメリカのようにはいくまいといった議論もあるが、国際社会の中ではこうしたことは通用せず、意見を言い、議論が冷静に出来る政治家を生み出すためにも、テレビ中継は一定の貢献が出来るのではないか。アメリカの C-SPAN は、そういう思いを抱かせてくれるのである。

C-SPAN は、国会審議の公開ばかりでなくて、広く社会の公共問題を取りあげており、政治家、官僚、ジャーナリスト、学者、専門家、社会的活動家などの社会的重要人物のスピーチ、討論、シンポジウムなどをカバーしている。何のコメントもなく、解説も編集もなく、取りあげたら初めから終わりまで、一切をそのまま写し出すのである。

このようなテレビ・チャンネルを私達は未だ持っていないので、一体どんなものなのか、興味をそそられるのである。今回は、こうした今までのテレビ放送の概念に当てはまらない新しいネットワーク・サービス、C-SPAN を取りあげてみることにした。

2) C-SPAN を視聴して

私は1989年2月から11か月間、ミズリー州カンザス市のロックハースト・カレッジに滞在し、その間地元のケーブルテレビを毎日のように見る体験を持った。34チャンネルのサービスをするケーブルテレビで、もちろん地上波のテレビ再送信をはじめ映画、スポーツ、音楽、ニュースなどさまざまなチャンネルがひしめいていた中で、一番興味をそそられたのが、C-SPAN であった。このことを身近かにいたアメリカの友人に話すと、それは一番退屈なチャンネルだろうと言うのであった。確かに、演説や討論を延々とやっているのであるから、退屈と言えば退屈である。しかし、関心があれば、関心のあるテーマにぶつかれば、これほど面白いチャンネルもないのではないかと思われた。

印象に残っているものをいくつか上げて説明してみよう。ベテラン政治家で、下院議会の議長を勤めていた民主党のジム・ライトが献金問題で追及され、委員会でその不正をめぐって審議が行われ、その模様が延々と中継された。委員会の一部ではなくそのやりとりの全てを写し出すのである。結局、ジム・ライトは辞任に追い込まれてしまうが、弁護士を立てての防戦、委員の追求といった攻防のプロセスは、見る人を巻き込んでしまう迫力があつた。

アメリカでは、大統領が閣僚を指名しても、上院の承認が必要で、その審査が委員会で行われるが、重要なものは全て中継される。重要な公職なわけであるから、本人の過去が追求され、酒癖が悪かったなどの事実が出てきて、本人が今後は一切禁酒を誓うとか、いや誓っても信用出来ないとか、といったやりとりが全部写し出されるのである。

C-SPAN は共和党、民主党の重要な党の会議も取りあげる。ジャパ・パッシングの論客で、日本の新聞紙上にもよく名前が出ていたゲッパート議員やダンフォース議員など、そういう人のスピーチが丸ごと聞けるということとても新鮮な感じがしたものである。ゲッパート議員のスピーチなどは、なかなかの迫力で、将来は民主党の大統領候補に出てきそうなそんな印象を抱かせる。新聞で主張の一部を知るといふのは違って、人物を知るうえで、全スピーチのテレビ中継にも大事な意味があるのではないかと思わせられる。

東京での日米構造協議に出席をして、帰国したばかりのヒルズ通商代表が、公開の席で早々と

報告スピーチを行った映像も、新しい情報を早く国民に向かって話しかけている、それが C-SPAN で実現していることに感銘を受けた。

そのほか他国の議会中継が私を驚かせた。イギリス、フランス、西ドイツ議会の模様の中継があったが、私にとっては初めて目にするものばかりで、とりわけイギリス下院議会でのサッチャー首相と労働党のキノック党首との論戦は圧巻という感じすらしたものである。

日本でテレビ放送が始って、1991年で38年目を迎え、テレビはありとあらゆるこの世の事象を写し出してきたかのように思われているが、こと政治の世界、公共問題の世界に限って言うなら、私達はまだまだ見ていないものがいっぱいあることをあらためて感じさせられたのである。

C-SPAN を視聴していると、放送で C-SPAN 発行の週刊プログラムや連邦議会のガイドブックの申込を受けつけていたので、私は早速それらを申し込んだ。週刊プログラムは「C-SPAN Update」というもので、定期購読をした。番組表だけではなく、主な番組の予告、放送後の反響、視聴者の投書、C-SPAN の活動などを紹介しており、C-SPAN を理解するのに大いに役立った。議会のガイドブックは「The U. S. Congress Handbook」というもので、議会の仕組み、各種委員会、全議員の写真入の紹介などがまとめられているのだが、ここにも C-SPAN の紹介がなされていて、それも参考になった。

3) C-SPAN の設立

C-SPAN は、1977年にケーブルテレビ産業の非営利団体として、ケーブルテレビの加入世帯に、public affairs プログラムを提供する目的で設立された。1978年6月に、下院議会がテレビ中継についての議決を行い、賛成235、反対150で可決される。1979年3月19日にデビュー、下院議会の議場からの生中継で幕を開けた。当初のスタッフはたったの4人、対象世帯は350万、それが1989年6月現在で、スタッフが160人になり、4,300万世帯を対象に、ほぼ全米のテレビ所有世帯の半分に達するまでに成長した。1日24時間放送になったのは、1982年以来である。

下院議会の議決で150人の反対票があったということは、テレビでの議会の公開について、不安や恐れ、心配を抱く人がいたことを物語る。下院のテレビ中継が始っても、上院の方は慎重で、1986年になって初めて認めることになる。

「議会ハンドブック」(The U. S. Congress Handbook 1989)によると、最初の心配は、議員たちが本来の政務に精を出すよりも、カメラに向かって演技をすることに時間をかけるのではないかということであったが、その心配は現実のものにならなかったと言う。議会の討論というのは、殆ど見られないであろうと予想されていたが、それも最近の調査では、1,400万の人々に見られていることが分かったと言う。

内容的には、地味な公共問題を扱い、そして利潤を追求しない非営利のチャンネルを生み出すとしたわけであるから、その苦勞がしのばれる。重要であったのは、こうしたチャンネルに社

会的意義を感じ、生み出そうとした関係者、議員の熱い情熱であったと思われる。設立の中心にあったのは、現 C-SPAN 社長の Brian P. Lamb 氏で、彼は理想に燃え、C-SPAN を非営利団体の民間企業として生みだすべく、ケーブルテレビ業界に働きかける。C-SPAN の誕生は、Lamb 氏のような中心的人材、議会のテレビへの解放に熱意を傾けた議員、それに情報化時代における民主主義の活性化に情熱を燃やしたケーブルテレビ・マンたちがいたからこそと言えるであろう。こうしたパイオニアの名に値する人達の夢の実現も、通信衛星と多チャンネルのケーブルテレビが利用できる時代の到来によって、現実化することが出来たわけである。

1977年に下院議員（カリフォルニア）で、議会へのテレビ導入を議決する時の通信小委員会の議長をしていた Lionel Van Deerlin は、議員たちが、テレビ導入がアメリカ国民の政府に直接アクセスできる権利を実現させることを目的としていることを理解してくれるよう望んでいたし、彼は国民が議会の出来事を他の誰かの説明に依存しなくてすむようになるだろうと考えていた²⁾。

当時、下院議長の James Wright (テキサス) は、政府と技術と選挙民とのこの結合を、国会にとっての「Town Hall」と呼んだ。1984年、当時の下院議長 Thomas O'Neill (マサチューセッツ) は、C-SPAN の放送は、政府の運営に関する限り、アメリカの好奇心を刺激した、と述べている³⁾。

C-SPAN は、政府によって作られたものではなく、私企業のケーブルテレビ産業によって作られ、サポートを受けている。ケーブルテレビ側に、こうした公共的チャンネルを設立せんとする人達がいたからこそ、実現したわけで、そういう人達のなかに、Gene Schneider, Amos Hostetter, Bob Rosencrans 達がいる。

Gene Schneider は、1953年、ワイオミングのカスパー (Casper) で、1チャンネルのケーブルテレビ局を始めたときは、27才であった。しかし現在は United Cable Television Corporation の会長で CEO を勤め、傘下のケーブルテレビ局の全てに、C-SPAN を流している。Amos Hostetter も、1963年にオハイオのティフィン (Tiffin) とフォストリア (Fostoria) でケーブルのフランチャイズをとった時は27才であった。今彼は、Continental Cablevision の会長で CEO を勤め、傘下のケーブルテレビ局の200万を越す加入世帯に、C-SPAN を送り届けている。Schneider と Hostetter は、事業が財政的に困難に直面しても、アメリカ人の利益のために C-SPAN をサポートしたのである⁴⁾。

Bob Rosencrans は、1977年に下院議会が、テレビ導入案を可決した時、UA-Columbia で知られる大きなケーブルテレビの会社の社長をしていた。議会中継のネットワークを作るという考えは、危険な提案のように多くの人には思われていたが、Rosencrans は、ケーブルテレビ産業が、パブリック・サービスに寄与することを示すまさに好機であると考えたのである。彼は仲間の Ken Gunter と一緒に C-SPAN をスタートさせる最初の貢献者となった。成長する私企業がアメリカ国民に贈るのに、議会のテレビ中継に勝る贈物があるか、と考えたわけである⁵⁾。

従来の視聴率を重視するテレビ・ネットワークの考え方からすると、議会の中継でしかも非営利の運営ということでは、全く非現実的で、およそ実現不可能という判断を与えられてしまうところであろう。C-SPAN は、広くアメリカ国民を対象にするのであるが、地味なチャンネルだから、視聴率原理ではかることの出来ないチャンネルだと考えなければならない。多くの人が見ているから価値が高く、見ている人が少ないから価値が低いといった考えは、意味がないわけである。やはり、理想に燃えたケーブル事業家がいたからこそ実現したのだと思われる。

下院議会から遅れること7年、1986年6月2日に、上院のテレビ放送が始った。C-SPAN II の誕生である。1987年1月、1週7日間の放送を開始、上院の放送に加えて、public affairs プログラムも放送する。1989年現在で、1,700万世帯をカバーする。

上院は大変慎重であったわけで、下院での経過を見ての決断であったが、慎重論が根強かったことがうかがえる。元上院議員の Howard Baker (テネシー) は、「上院の議論のテレビ放送は、Public Gallery の単なる電氣的延長であると思う。議会の審議を秘密にしておくべきであると主張するのはむずかしい。Public Gallery とテレビ放送との差は、程度の問題である。アメリカ合衆国のような大きな国では、立法の仕事を公衆に知らせる正しい方法は、Public Gallery によってではなく、テレビを通してすることであると思われる」と言う⁶⁾。さらに Baker は、「テレビと議会」シンポジウム(1990年6月26日、主催：日米議会交流イベント実行委員会)に寄せたメッセージの中で、「上院での審議のテレビ中継は、上院の一般傍聴席の延長として当然の成り行きであると考えていました。上院審議が低下するよりも、むしろ、アメリカ国民の目にさらされることによって焦点も絞られ、議論も向上すると考えたわけです」とも述べている⁷⁾。

上院の議決で反対票を投じた上院議員の Jake Garn (ユタ) は、「カメラが大袈裟なジェスチャーや華やかなスピーチを助長したり、スタンドプレーをさせたり、重要な法案通過を、スピーチを長くして遅らせたりすることを懸念している。それが本当になり、私の反対票は正しかったと思う」という意見を述べている⁸⁾。

ともあれ、アメリカの連邦議会は、下院も上院も本会議から各種委員会まで、テレビ中継によって公開されるに至っているのである。

4) C-SPAN の運営

C-SPAN はケーブルテレビ局の、実質的には MSO (Multiple System Operator) の非営利の共同体が所有し、サポートしている。ケーブル加入世帯、1世帯につき月額約5セントを徴収、C-SPAN I も II も Galaxy III によっており、C-SPAN I を取っているケーブルオペレーターは、C-SPAN II は無料で受けられる。両者を受け入れるに十分なチャンネル・スペースを持っているケーブル局にとっては、C-SPAN が党派性のないパブリック・サービスであることが魅力となっている⁹⁾。

コマーシャルはないが、企業のアンダーライティングは認められている。財政の95%を越えるものが、ケーブルテレビ局から入る収入で、それを補って代表的な企業からの寄附金がある。C-SPANは、ベーシック・サービスの中で、提供されており、そのベーシックの料金が大体1世帯月額13ドルぐらいなので、ケーブル・オペレーターはそのうちから、約5セントをC-SPANに支払う。ベーシックの加入世帯が増えれば、C-SPANの収入も増えることになる。寄附を出す企業には、Time Inc., Harper's Magazine, IBM, DUPON, Bell Atlantic, Garnett Foundation, Health Insurance Association of America, General Instrument, Ameritech, General Dynamics, American Federation of Teachers といった名前が上がっている。

C-SPANのような公共ネットワークを私企業が維持していくのにはそれなりの仕掛けがいるはずである。私は、複数のチャンネルを一括してベーシック・サービスとして、料金をまとめて徴収してしまうベーシック料金制度に、その秘密があると思っている。人気のある娯楽のチャンネルも退屈なチャンネルも一括料金の中に共存させることによって、退屈なチャンネルも存在することが出来るわけである。もし、一つ一つのチャンネルが独立して料金徴収をする制度であったとしたら、採算をとるために、マス・オーディエンス・オリエンテッドな運営をしなければならなくなり、そうなれば、公共問題専門のチャンネルなどを生み出すことは、とても不可能なことと思われる。ケーブルテレビが、ベーシック・サービスとペイ・サービスとに分けた料金システムを採用しているのは、実に合理的な方法だと言わなければならない。

議会中継の仕組みであるが、議会の本会議は、議会自身によって認められた組織と設備によって撮影される。C-SPANを含めて、ニュース・メディアは、本会議場に自らのカメラを持ち込むことは出来ない。カメラ・アングル、カメラ・ショット、音声に関する編集上の決定は (editorial decisions)、議会によって雇われたスタッフによってなされる。下院議会のテレビは、下院議長のコントロール下に置かれ、上院のテレビは、議員運営委員会 (the Committee on Rules and Administration) の指導下に置かれる。この議会専門スタッフによる本会議のテレビ映像は、議会の承認があるニュース機関であれば、自由に使用することが出来る。本会議の映像は、C-SPANもこれを用いる。本会議以外の委員会や公聴会、議会内のさまざまなイベントは、C-SPANだけでなく、CNNもCBS、NBC、ABCも独自に番組化することが出来る¹⁰⁾。

5) 編成方針と番組

C-SPANの編成方針は、「初めから終わりまで。編集なし。解説なし」が方針である。議会関連の番組は、「初めから終わりまで」、解説も説明も一切なしで、対象をそのまま写し出す。これは何の委員会かというのは、画面表示で示される。記者会見やシンポジウムなどを取りあげる時も「初めから終わりまで」である。編集なしで解説や説明も何もしない。長い会議などの場合、基調講演だけを取りあげる時があるが、その時も講演は「初めから終わりまで」で、要約は一切や

表1 C-SPAN の週間番組編成表(1990年2月18日～2月24日)

(番組は日によって変更あり)

Eastern Time	SUNDAY February 18	MON Feb 19	TUES Feb 20	WEDS Feb 21	THURS Feb 22	FRI Feb 23	SATURDAY February 24	Pacific Time
7:00 am	House debate, taped hearing, or policy address	Booknotes Capital Agenda	House floor debate, congressional hearing, or public policy conference				House debate, taped hearing, or policy address	4:00 am
8:00 am	Viewer Call-in Highlight of the Week Are-air of a call-in program recorded the previous week	American Profiles: Tom Korologos and Jack Valenti	Viewer Call-in: Public policy experts review the day's events.			Journalists' Roundtable A review of the week's news.	Viewer Call-in Highlight of the Week A re-air of a call-in program recorded the previous week	5:00 am
9:00 am	Congressional hearing, public policy conference, or address	Congressional hearing or public policy conference	Congressional hearing or public policy conference	U.S. House of Representatives	U.S. House of Representatives	U.S. House of Representatives	Close Up Foundation	6:00 am
10:00 am			Joint meeting					7:00 am
11:00 am							Communications Today: C-SPAN's weekly program following issues in the media	8:00 am
Noon			U.S. House of Representatives	U.S. House of Representatives			Congressional hearing or public policy conference or address	9:00 am
1:00 pm								10:00 am
2:00 pm								11:00 am
3:00 pm								Noon
4:00 pm								1:00 pm
5:00 pm								2:00 pm
6:00 pm		Harvard Law School: The Stuart Murder Case	Live Viewer Call-in: Congressmen, administration officials, of public policy experts respond to viewer questions about the day's events.				The Prime Minister of Norway Jan Syse addresses the National Press Club.	3:00 pm
7:00 pm							Supreme Court Review examines three	4:00 pm
8:00 pm	Booknotes: Author Peggy Noonan: "What I Saw at the Revolution"	American Profiles: Tom Korologos and Jack Valenti	Event of the Day: One of the key congressional hearings, public policy conferences.	Czech President Havel	Event of the Day: One of the key congressional hearings, public policy conferences.		Public policy conference of address	5:00 pm
9:00 pm	Capital Agenda	Event of the Day					Journalists' Roundtable: Three reporters discuss the week's headlines.	6:00 pm
10:00 pm	House floor debate, congressional hearing, or public policy conference							
11:00 pm							Prince Charles addresses the American Institute of Architects first annual "Accent on Architecture" Awards Gala dinner.	8:00 pm
Midnight							House floor debate, congressional hearing, or public policy conference	9:00 pm
1:00 am								10:00 pm
2:00 am								11:00 pm
3:00 am								Midnight
4:00 am								1:00 am
5:00 am								2:00 am
6:00 am							3:00 am	

(「C-SPAN Update」1990年2月18日号より)

(黒枠部分は生放送)

らない。要は、現実そのもの、第1次情報を取りあげていくという考え方である。

全て生放送というわけではなく、本会議とコール・イン番組（Call-in）には、生放送が多いが、ビデオ収録もよく使われている。週日の午後8時以降、土曜日と日曜日は大体が録画の放送である。

番組をいくつかのカテゴリーに分けて見ていくことにする。（表1を参照）

（1）「Event of the Day」

この日にあったか、少し前にあったかの出来事を取りあげる。議会の本会議、各種委員会、公聴会、公共政策の会議、ニュース・ブリーフィングなどが対象となる。

a) 議会関連の番組

議会の討論は、番組全体の中では、ごく一部に過ぎないが、編成全体の中では中核部分をなす。議会の討論は、最大の公共問題なわけである。議会の各種委員会、小委員会、公聴会を取りあげるようになったのは、下院で1981年から、上院で1988年からである。現在では、これら議会関連の番組の全体の中で占める割合は、ファースト・ラン（first-run programming）で約10%程度である。量的にそれほど多いというわけではない¹¹⁾。

午前、午後によって行われる本会議の様子は、生放送で放送されるが、録画で夜やウイークエンドにも再放送される。白熱した討論は、本会議場もさりながら、委員会の中継でよく見られる。取り上げられる問題によっては、退屈どころか、耳目を喚起させるに十分なシーンが展開する。

1987年5月には、イラン・コントラ事件のヒアリングが完全中継された。私がアメリカ滞在中で見たもので印象深いものでは、上院の弾劾裁判委員会（the Senate Impeachment Trial Committee hearings）での審理の様相がある。フロリダの連邦裁判官である Alcee Hastings が賄賂と偽証の疑いで、弾劾裁判にかけられたのである。Hastings は1988年8月に既に下院議会によって弾劾を受けており、上院での弾劾裁判で有罪と決まれば、生涯その職を失うことになる。その審理の様相を、C-SPANは何週間に及んで初めから終りまで中継したのである。私は、1989年8月28日から30日まで、連続3日間、朝の9時半から午後1時（東部時間）まで、ビデオテープによって流されたものに接した。追求する側も、追求される側も真剣そのものであり、こういう場面は、人々に審理の様相を目撃させることを越えて、政治と裁判についての教育をしているのではないかと思わせられた。

議会関係では、連邦議会ばかりでなく、ホットな社会的問題を審議する州議会の模様を取りあげるときがある。例えば、アボーションをめぐる賛否が沸騰している場合とかである。

b) 公共政策の会議

例えば、全国知事会議の年次総会が開かれると、その模様が生とテープで長時間取り上げられる。1989年7月30日から8月1日までの3日間、全米知事会議がシカゴで開かれるが、C-SPAN

では7月30日（日）、午前10時半から午後6時（東部時間）まで、視聴者からのコール・インをはさみながら、延々7時間半を費やし、経済問題、環境問題、地域問題、刑務所問題など、アメリカの直面する問題を論ずる代表者のスピーチが流される。90年の同大会は、ワシントンで2月25日（日）から27日まで開かれる。C-SPANは25日の朝9時半から午後7時（東部時間）まで、9時間半を当て、その中でRichard Darman 財務長官、Carla Hills 通商代表、James Baker 国務長官などのスピーチを取りあげる。

第57回の全米市長会議が、1989年6月19日—20日に開かれ、「麻薬戦争」と「エイズ問題」のセッションが、閣僚、市長、専門家を交えて持たれるが、C-SPANでは、その模様を6月24日（日）と25日（月）の午後1時から3時半（東部時間）まで、録画で放送する。

c) 政党の会議

共和党、民主党の全国大会を編集・解説なしで完全中継するが、党の中の重要な会議も取りあげる。1990年1月のワシントンにおける共和党全国委員会の総会とスピーチを取りあげ、C-SPANは、1月19日（金）午前9時半から正午までと午後2時から3時半（東部時間）まで、生中継でこれを流す。

あるいは政党の資金集め（Fund-Raising Dinner）なども取り上げられており、そのなかでのスピーチが放送される。1989年6月12日（月）、民主党の資金集めのディナーが行われるが、午後9時（東部時間）から2時間が当てられ、基調講演に立った上院のマジョリティー・リーダーであるGeorge Mitchellの「民主党は上院選挙に勝つために何をすべきか」のスピーチを伝える。

d) 政治討論会・パネルディスカッション

主催団体としては、財団、研究団体、大学などいろんな団体があるが、それらが主催して、政治家の討論会や政治的・社会的テーマのディスカッションが、随時開かれており、C-SPANはそれらを選んで、生中継や録画で「初めから終わりまで」放送するのである。いくつかの事例を上げてみる。

バージニア州の知事選挙において、アポーションと麻薬の問題が政治的争点になり、これは全国的争点でもあったのだが、民主党のL. Douglas Wilderと共和党のJ. Marshall Colemanが激しい選挙戦を展開し、討論会を開く。C-SPANはこの討論の模様を、1989年10月9日、午後8時（東部時間）から生中継する。

1989年6月24日から3日間、「21世紀のアメリカの教育」のテーマで、政治家、教育者、関係閣僚が一堂に会してのセミナーが開かれるが、C-SPANは6月24日（土）午後3時半から6時（東部時間）までを当て、二つのパネルを放送する。最初のパネルは「Youth Service: Democratic Values and Emerging Opportunities」で、第2は「Connecting Schools to Families and Communities」をテーマとしてパネルディスカッションが展開された。

The Communication Consortiumの主催で、ワシントンで地球温暖化問題のパネルディス

カッションが開催され、その模様が1990年1月13日、午後3時から5時(東部時間)まで放送される。

1990年2月19日、「Harvard Law School Panel」が、午後6時から8時(東部時間)まで放送される。1989年、マスコミで最もセンセーショナルに扱われた殺人事件の報道をめぐって、それはフェアなレポートであったのかについて、法律関係者、ジャーナリストが集まって、Harvard Law School で検証しようとしたパネルディスカッションである。

1989年7月4日、午後8時から11時(東部時間)までの3時間、Fordham University 主催の「アメリカの経済問題と未来の大統領について」のシンポジウムが放送される。大学教授、ジャーナリスト、それに Theodore Sorenson (ケネディー政権の特別顧問) が加わって議論を交わす。

1989年6月17日、午前11時から11時55分(東部時間)まで、連邦通信弁護士協会と雑誌「Broadcasting」との共催による「Broadcasting VS. Cable」のセミナーが放送される。放送側とケーブル側から参加者が出てのパネルディスカッションである。放送事業者とケーブルオペレーターとの関係、産業を規制する政府の役割、コミュニケーション産業の未来に影響を与える技術的發展などについて議論が交わされる。

e) 重要人物のスピーチ

社会的な重要人物が、何かの会合で基調講演を行うと、そのスピーチが取り上げられる。1989年7月16日、午前11時半から12時(東部時間)までの30分間、民主党の下院マジョリティー・リーダーの Richard Gephardt が、化学製造業者協会のフォーラムで行った「貿易問題及び貿易法案について」の基調講演を流す。同日、正午から12時半(東部時間)まで、副大統領 Dan Quayle が National Association for the Advancement of Colored People の席において、市民権運動について行ったスピーチが取り上げられる。

1989年9月12日、訪米中のソ連最高会議常任幹部会メンバーであったボリス・イェルツィンが、ジョン・ホプキンス大学でスピーチをしたが、そのときのスピーチとその後の会衆との質疑応答が放送される。

以上、C-SPAN の「編成方針と番組」について見てきたが、こうした現実の進行をストレートに写しだす、視聴者の方からすれば、目撃出来るということになってくると、ジャーナリストの役割がどのように変わっていくのであろうかという問題が生ずる。

コール・イン番組で、視聴者が次ぎのような質問をする。「私達は、C-SPAN の上で議会を見て、現実の進行を見る。そして、新聞がそれを要約し、適切なポイントを指摘する。その時、新聞で書かれている内容と、実際に議会の委員会を見るものとは、非常に違ったものになっている時がある」。この疑問に対して、U. S. News & World Report 記者、Steven Roberts が答える。「視聴者は、C-SPAN の上で見るものが、自然にそのまま起こっていることだと思っていけない。C-SPAN で見るものは、非常に注意深く、巧妙に仕組まれた政治的計算の産物なの

であること。そこには多くの政治的な策略が、進行していることを理解して、見守らなければならない。ジャーナリストの仕事の一つは、視聴者が見ているものだけが全てではない、ということを示すことにある¹²⁾。

(2) コール・イン (call-in) プログラム

議会関連の「Event of the Day」が番組編成の中核ではあるが、次いではコール・イン番組が重要視されている。これは生放送で行われるが、再放送もされる。視聴者が電話で、番組に登場している下院議員や上院議員、閣僚、政府高官、政策専門家、ジャーナリストに直接質問することが出来る番組なのである。番組表には、「Viewer Call-in」と載っている。パブリック・アフェアーズをテレビで公開するだけでなく、視聴者の政策決定に係わる人へのアクセスを可能にし、双方向で意見を交わす機会を提供している。

その他に、「Journalists Roundtable」という視聴者からのコール・インで質問を受け付けて、ジャーナリストが答えるという番組がある。

電話のかけ方は、C-SPAN が発行する週刊ガイドの「C-SPAN Update」に詳細が掲載されている。それによると、話し中であれば、もう一度試みる。ベルが鳴れば、そのまま待つ。ベルが長く鳴り続けてもそのまま待つ。(長距離電話であれば、受話器を取ると、料金がかさむので、オン・エアへの態勢が整うまで、受話器はとられない)。つながると先ず、オペレーターが尋ねる。(1)電話をかけている街と州、(2)以前に電話したことがあるかどうか、あればいつ。(3)ケーブルテレビ局の名前、(4)質問の内容、が尋ねられる。以前に電話した人は、多くの視聴者に参加してもらうために、30日以上の間を空けなければ再登場出来ないことになっている。

C-SPAN は、コール・イン番組のパイオニアであって、それを1980年に始めた。1988年には、下院議員の半数以上、上院議員100人のうち75人が、視聴者からのコール・インを受けている¹³⁾。1989年では、下院議員182人(民主党92人、共和党90人)、上院議員55人(民主党22人、共和党33人)が応答している¹⁴⁾。

生放送は、レギュラー・プログラムとして、月曜から木曜日の朝8時から9時半(東部時間)と、月から金の午後6時半から8時までに編成されている。そして土曜と日曜の午前8時から9時半(東部時間)までが、その週の主だったコール・イン番組の再放送に当てられる。

視聴者からかけられる電話で、いたずら電話や無礼な電話とかいったものはないのであろうか。クッションをおいて、一度検閲をした方がよいのかどうか、難しい問題である。「C-SPAN Update」に掲載される視聴者の声欄に、そうした質問がなされており、それに対して C-SPAN 側が答えている内容を見ておこう。

「老人風の男が女性のホストの一人にデートを申し込もうとしていた。不愉快で、わいせつな電話は、放送するべきでない。プロデューサーは自動的にスイッチをきるべきである」という質問に対して、C-SPAN 側は、「C-SPAN 通話者のどんな言葉も制限する方法を持たない。幸に

して、C-SPAN 生番組で通話者が、わいせつな言葉を用いたり、コール・イン形式を悪用するといった事件は、相対的に言って、殆ど起きていない」と答えている¹⁵⁾。滅多に起きないけれども、起きないことはないわけである。従って、次ぎのような投書も載るわけである。「C-SPAN は生放送であれ、再放送であれ、無礼な (offensive) 言葉について検閲をするな。一度言葉の編集をやりだすと、それは編集コメントになってしまう。無礼な言葉もしばしばスピーカーのメッセージにとって役にたっているかも知れない。そうでないなら、それはスピーカーの正体を自ら暴露していることになるだけだ」。これに対して、C-SPAN では「極端な場合における無礼な言葉のみを消している」と答えている¹⁶⁾。

(3) ナショナル・プレス・クラブ

ナショナル・プレス・クラブで行われる全ての昼食会スピーチが取り上げられる。土曜日の午後6時（東部時間）から1時間レギュラーで用意されている。訪米中の外国の大統領や首相・要人、及び国内での重要人物、話題の人物のスピーチを、「初めから終わりまで」伝え、その後の質疑応答もフォローする。政治家からエンタテイナーに至るまで、各界の重要人物が登場する。

当地で私が見たものから、いくつかを上げてみると、1989年の6月24日、National Gallery of Art の会長 J. Carter Brown が、ディレクター20周年記念として、過去20年の芸術界の革新についてスピーチを行う。7月1日、オーストラリアの Robert Hawke 首相が、アメリカに対するオーストラリアの外交政策について演説をする。7月8日、アメリカの統合参謀会議議長の William Crowe が、ソビエト訪問の成果を語る。

1988年度では、77時間がさかれたというぐらいであるから、私のノートの記録にあるのは、ほんの一部にしか過ぎない。全てのスピーチが、魅力に富んでいるというものではないだろうし、退屈なものもあるに違いない。「初めから終わりまで」流すのが方針であるから、一般の人々にとっては、多くは退屈なスピーチであるのかも知れないと思う。しかし、私はじって見ていて、責任ある立場の人々が、何を考えているのかが、公にされていることの意味が大きいと思った。関心のある人々からすれば、「初めから終わりまで」見ることのできるスピーチは、第3者による要約ではなくて、自らがその全体に触れる機会を得るチャンスとなるわけである。このことの意味が大きいと思う。

(4) America and the Courts

土曜日午後7時（東部時間）から1時間、裁判問題が取り上げられる。毎週、弁護士やジャーナリスト、法律専門家が集まって、連邦裁判所がかかえる問題をディスカッションする。最高裁が、重要な決定を出した時には、「Supreme Court Review」という番組にして、弁護士、ジャーナリスト、法律専門家を招いて、最高裁の最新の動きをレビューする。

私の印象に残っているのに、1989年7月5日、イラン・コントラ事件で裁判に付されていた

Oliver North 大佐に有罪判決が下されると、C-SPAN は、すぐさま、弁護士とジャーナリストの反応をワシントンの裁判所から伝えたものがあった。

(5) Booknotes

日曜日午後8時(東部時間)から1時間、主に政治・外交・国際問題に関する書物を取り上げ、1回に一人の著者とのインタビューが行われる。再放送は、月曜日午前6時30分から。どんな本が取り上げられているか、その一部を紹介する。Judy Shelton “The Coming Soviet Crash: Gorbachev’s Desperate Pursuit of Credit in Western Financial Markets”, Zbigniew Brzezinski “The Grand Failure: The Birth and Death of Communication in the Twentieth Century”, Bruce Oudes “From: The President: Richard Nixon’s Secret Files”, Susan Moeller “Shooting War: Photography and the American Experience in Combat”, Henry Brandon “Special Relationships: A Foreign Correspondent’s Memoirs”, James Fallows “More Like Us: Making America Great Again”, Gregory Fossedal “The Democratic Imperative: Exporting the American Revolution”, Stanley Karnow “In Our Image: America’s Empire in the Philippines”, Sen. Robert Byrd “The Senate 1789-1989: Addresses on the History of the United States Senate”, Michael Fumento “The Mith of Heterosexual AIDS”, Peggy Noonan “What I saw at the Revolution: A Political life in the Regan Era” などがあり、政治、国際関係の多いが目立つ。

(6) Capital Agenda

日曜午後9時(東部時間)から30分の番組で、議会内のスタッフに対するインタビューやワシントンにおける次週の主要な問題を論ずる議会のリーダー達へのインタビューがその内容である。例えば、上院の議会スタッフの専門家である Alan Frumin が議会での自らの責任と義務について説明をする。上院の規則や、法案作成のプロセスなどについて説明。議会の審議の模様だけではなく、議会内部の仕組みや運営について知らせようとしている点に注目しておきたい。議会を国民の前に「透明に」するという C-SPAN の姿勢を示すものとして考えることが出来る。

(7) Journalists’ Roundtable

金曜日の午前8時(東部時間)から1時間30分の生番組で、3人のジャーナリストが、視聴者からのコール・インを受け付け、それに応答しながらその週の出来事について話し合う。再放送が土曜日の午後9時(東部時間)から行われる。

（8）American Profile

準レギュラー番組のような形で、アメリカの注目される人物との1時間のインタビュー番組が編成される。例えば、上院議員が、自らの経歴や生活と意見を語るとか。ワシントンのロビーストで有名な Tom Korologos, アメリカ映画協会会長の Jack Valenti, テレビ・ジャーナリストのベテランの Eric Sevareid, 同じく Howard K. Smith など各界の人達が、取り上げられている。

以上、8つのカテゴリーで示した番組は、毎週のレギュラーあるいは準レギュラーのプログラムであるが、臨時に単発編成される番組がある。若干の例を、その他として紹介しておきたい。

（9）その他

著名人の表彰式ディナー・パーティの中継で、そこで賞を受ける人、与える人が行うスピーチが取り上げられる。例えば ABC ニュースのベテラン放送ジャーナリストの David Brinkley と Wall Street Journal 編集長の Norman Pearlstine が、National Press Foundation から表彰を受けたが、その模様の一部始終が放送される。

国勢調査が10年毎に行われるが、1990年1月10日、午前9時30分から、午後3時までの5時間30分、C-SPAN は調査局からのレポート、調査の内容、調査の歴史などについてと同時に、調査の正確さに疑問をもつグループのディスカッションを取り上げる。

「Agriculture Day」のような特別番組を組む時には、ディスカッションを行うばかりではなく、下院と上院の農業委員会のメンバーが、視聴者からのコール・インを受け付けて、質問に答える、ということをする。

また、「議員のある1日」という形で、議員の分きざみのスケジュールを追っかけて、日常、議員がどんな生活をしているかを紹介する。外国の議員の1日の仕事ぶりとして、イギリスの女性国会議員の選挙区での活動ぶりを紹介したりもする。

以上、C-SPAN の編成方針と番組について九つのカテゴリーについて見てきたが、議会関係の中継ばかりではなくて、公共問題を幅広く取り上げていることがわかる。国民から選ばれた政治家が、議会で何をしているのか、どんな意見をもって行動しているのか、政治家に焦点を当てるばかりでなく、政党の活動も積極的に取り上げられ、公共問題が論議される会議もよく取り上げられている。政治家や官僚に次いでジャーナリストの登場が目立つのも C-SPAN の特徴である。新聞、雑誌、放送、通信社のジャーナリストが、起用される。

公共問題の何を取り上げるかは、C-SPAN が判断するが、取り上げたものについては、「初めから終りまで」「解説なし、編集なし」の編成方針が貫かれており、ここにこれまでとは違った、もう一つ別のジャーナリズムが出現したと考えることが出来る。

6) C-SPAN のオーディオ・サービス

(1) オーディオネットワーク I

C-SPAN は、1989年9月5日から、二つのオーディオ・ネットワークを開始。通信衛星の Galaxy III 経由で、ケーブル加入者に送られる。もちろん、ケーブル局の方が、必要な設備を備え付けなければ、受けてもらえない。

オーディオ・ネットワーク I は、1990年5月現在で、100万世帯を越えて利用されており、毎

表2 C-SPAN ラジオネットワーク I のプログラム

	Mondays-Fridays	Saturdays and Sundays
7:00	Radio	Radio
7:30	Japan	Japan
8:00	"North Country" Radio Canada International	Classical Music or Live Congressional Hearings
8:30		
9:00 am-8:00 pm	Classical Music or Live Congressional Hearings	
8:00	"Newsdesk" BBC World Service	"Newsdesk" BBC World Service
8:30	Classical Music	Radio Nederlands
9:00	Radio Japan	
9:30		Classical Music
10:00	Swiss Radio International	Swiss Radio
10:30		International
11:00	Deutsche Welle (West Germany)	Deutsche Welle (West Germany)
11:30		
midnight	Radio Beijing	Radio Beijing
12:30		
1:00	Classical Music	Classical Music
1:30	Radio Austria International	Radio Austria International
2:00	Daybreak Africa (Voice of America)	Daybreak Africa (Voice of America)
2:30		
3:00-6:00	Classical Music	Classical Music

(「C-SPAN Update」1990年5月20日号より)

日、議会の演説や公聴会、プレスクラブのスピーチなどを放送、と同時に外国の国際放送をそのまま取り上げる。Radio Canada, Radio Japan, Swiss Radio International, Deutsche Welle, Radio Beijing, Radio Austria International, Radio Nederland, Voice of America, “Newsdesk” BBC World Service の9ヶ国のラジオ放送が取り上げられている。（表2を参照）

こうした外国の国際放送がそのまま流されると、アメリカに対するさまざまな意見が、聴取者の耳にそのままはいつてくることになる。例えば、1990年1月のアメリカのパナマ侵攻の時、C-SPANのオーディオ聴取者は、そのリアクションをカナダから、日本から、スイスから、オーストリアから、ドイツから、中国から聞くことが出来た。中国はアメリカのパナマへの軍事侵略について非難をしたが、それはそのまま流されるというわけである。外国の国際放送は、政府がコントロールしていたり、寄金を出していたりして、その国のプロパガンダが入るが、C-SPANは、「我々は、違った見解を探し、あらゆる見方を提供して、人々に選択してもらおう」と考える¹⁷⁾。

Voice of Americaは、USIA (U. S. Information Agency) によって運営されており、アメリカ国内では、短波ラジオでしか聞くことが出来なかった。それは40年から前の法律、Smith Mundt Act によって政府が国内プロパガンダの道具として、VOAを用いることを禁じていたが故である。しかし、最近の裁判所のルールでは、私的な団体には適用を及ぼさないという判断がなされ、C-SPANは短波でキャッチして、それを衛星経由で加盟ケーブル局に送ることにしたのである。C-SPANは、1990年1月22日から、VOAをオーディオ・ネットワークに乗せた。表2に見られるように、VOAは西部アフリカ向けの英語放送“Daybreak Africa”をピックアップしている¹⁸⁾。

(2) オーディオネットワークII

オーディオIIは、24時間放送で、BBCのワールド・サービスを流す。ニュースから音楽文化まで幅広く取り上げられる。“News About Britain”, “A Jolly Good Show (record requests),” “Book Choice”, “Here’s Humph!”, “Network UK”などの番組がある。国際放送のなかでも、BBCが特別に多く取り上げられているのは、アメリカとの近さを物語るものと言える。

とは言え、C-SPANが、世界のさまざまな異なる見解を、アメリカ自身の利害とは関係なく取り上げて、アメリカ国民をして、出来るだけ多様な意見に曝させようとしている姿勢が読み取れる。

7) C-SPAN と教育

(1) C-SPAN in the classroom

C-SPAN そのものが、広い意味で国民に対する政治教育を果たしていると考えることが出来

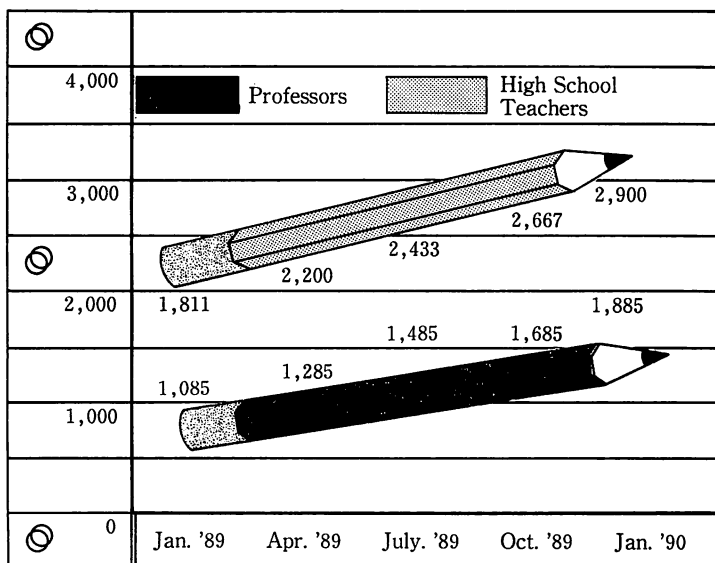
るが、C-SPAN は特に若い人々に対して、特別の教育プログラムを実施している。

教育サービス部 (Educational Service Department) を設け、「C-SPAN in the classroom」を組織し、教育者はここに登録すれば、C-SPAN の了解なしに、自由に番組を録画し、教室で使うことが出来る。営利目的で使用したり、政治的目的に利用することではないので、使用料は無料である。

「C-SPAN in the classroom」に登録したメンバーには、1) 毎日の番組情報が聞き出せるツール・フリーの Educator's Hotline の利用。2) 議会のテレビ中継手続きに関するガイドの入手。3) 無料の教材。4) 「C-SPAN Update」の料金割引。5) Purdue Video Archives における C-SPAN の放送済みテープを実費で入手出来る、といった特典が与えられる¹⁹⁾。

1990年1月現在、教育者の登録メンバーは、高等学校教師が2,900人、大学教授が1,885人で、計4,785人に達している(表3を参照)。C-SPAN では、教室で C-SPAN をどのように使うかについてのガイドとして、25分の「C-SPAN in the classroom」のビデオテープを配っている。番組のパッケージとしては、深夜に「Short Subject」という10分番組を送り出している。学校の夏休みを利用して、学校関係者を集めた「Seminar for Professors」が開かれ、そこで C-SPAN のスタッフは、著作権の問題、ビデオ編集の問題、クラスルームへの番組の関連づけなどについて話す²⁰⁾。1990年1月15~16日、第5回目のセミナーがワシントンで開かれ、33人の大学教授達が集まり、教室で C-SPAN をいかに使うかについて、討論を行った²¹⁾。

表3 「C-SPAN in the classroom」の教員登録数



(「C-SPAN Update」1990年1月14日より)

（２）C-SPAN の教育利用

C-SPAN は、C-SPAN において放送される番組が、教室において利用されるに値する優れた教材と考えている。先ずその理由は、C-SPAN の番組は、編集の手を加えず完全なものを提供するのだから、それは一次的な情報ソースであるという点である。第一次情報に触れることで、学生達は、自らの情報ストックを増やせられ、分析・解釈・批判的思考の能力を発展させることが出来、学生達に“*You are there*”の学習機会を提供できるというわけである。教師達からすれば、生徒が理解し難い概念やコミュニケーションと市民権利の行使の仕方について教える具体的な方法を手にすることになる。

エイズ問題、麻薬、政治スキャンダル、選挙キャンペーン、戦場の兵士、環境問題など、学生達はそれらの問題に取り組む指導者やジャーナリストを見、主張を聞きして反応することが出来るし、コール・イン番組の中で、他の市民がどのように考えているか、政治家に何を伝えているかを学ぶことが出来る。また政府の働き、法律がどのように作られていくのか、政府の行為についての矛盾や必要な妥協についても学習が出来る、というわけである。

それでは、どんな利用の仕方があるのか、その例をみてみよう²²⁾。

◇グローバル教育

第三世界と U. S. A. との関係について……先ず、次ぎの問いについて、事前に賛成か反対かの答えを取って置いて、問いに関係する C-SPAN のプログラムを集めて視聴させる。その後、再び反応を調べて、初めの態度がどう変化したかについて、ディスカッションをする。問いとしては、1) 発展途上国は、U. S. A. からの援助金の受け取りを拒否し、自ら努力するべきである。2) U. S. A. の人々は、第3世界の国々について、もって関心をもつ必要がある、などが考えられる。

人権問題での政府や国際連合の働き、国境を越えての民間グループの努力について……先ず、難民に対する U. S. の政策、中東におけるアメリカの人質問題、南アフリカの闘争、ユダヤ人に対するソ連の政策、発展途上国の婦人の役割の変化などの C-SPAN 番組を見ることで、テーマにかかわる概念をとらえさせる。

テロリズムについて……誰が今日のテロリストなのか、その動機は？動機は政治的なものなのか？宗教的なものなのか？誰が犠牲者なのか？テロリズムに対する U. S. の政策は何か？テロリストの活動は、世界のパワー・バランスに影響を与えられるか？など、これらの質問に答えられるように、C-SPAN の番組を抜き出して活用する。

◇行政・立法・司法について

行政機関の公務員の役割……C-SPAN での下院と上院の委員会や公聴会、などを見ることによって、そういう人達の仕事ぶりを理解させる。

選挙について……政党の幹部会、政治集会、党のノミネート大会などの C-SPAN 番組が活用

出来る。

裁判官について……C-SPAN でのシリーズ番組である「アメリカと裁判所」が役にたつ。裁判官に対するインタビューは、憲法の働きや司法の勉強をするのに役立つし、裁判官のノミネーションについての上院の委員会や上院議員、下院議員へのインタビュー番組も役にたつ。

◇Public Speaking について

C-SPAN の番組を利用して、討論に備えさせる勉強や日頃のスピーチに役立つようなスピーキングの勉強をさせる。1) プレゼンターは意見を明瞭に述べているか、2) 議論を要約させる、3) どちらが勝っているか、何故そう思うかについて、議会でのスピーチ、候補者の選挙演説などのテープを素材にして学習させる。

日頃のスピーチでは、C-SPAN のさまざまな番組上に素材がある。知らせるためのスピーチ、聴衆に信じさせるスピーチ、紹介スピーチ、賞を受けるスピーチ、誉め讃えるスピーチ、ノミネートするスピーチ、ノミネートを受けるスピーチ、インタビュー、ディスカッション、ディベート、フォーラムでのスピーチ、さよならスピーチなど、スピーチについて勉強をさせる。

◇経済と消費者教育について

財政赤字、国際貿易、運輸、消費者問題など、C-SPAN の番組を利用することによって、経済と消費者に関する新しいボキャブラリーを増やすことが出来る。

◇ジャーナリズムについて

C-SPAN での記者会見を見させ、それとおなじ記者会見の新聞報道をチェックさせる。またネットワークテレビが、それをどのように扱ったかを調べさせる。メディアの違いやそれぞれのレポートのバイアス（そういうものがあれば）を分析させる。バイアスについてディスカッションをする。

以上、若干の例を紹介したに過ぎないが、C-SPAN の番組が第1次的情報に相当するものであることの意味が大きいと思われる。それらは生きた教材になるわけである。教育素材として活用しようとする動機も、教育者の関心を引くのも、現実そのものとしての素材であるが故であると思われる。その上に、C-SPAN が、教育者に対して、学校で録画しても家庭で録画してもよいという便宜を与え、学校内にカリキュラムに見合ったビデオのコレクションを作ることを奨励し、ビデオ・アーカイブズから望みの番組を実費で購入できる、といった体制作りが効を奏していると考えられる。

8) 番組の記録保存

C-SPAN の放送番組の全てが、Purdue University のなかにある Purdue Video Archives に保存されることになっている。Purdue University が、C-SPAN の番組の歴史的な重要性を認識して、C-SPAN の全ての番組を受信し録画して、コンピュータ・データベースによって、

整理・保管している。それは、言ってみれば映像資料の「公文書館」のようなものと言える。Purdue University では、もちろん大学の授業に C-SPAN を活用している²³⁾。

C-SPAN は、公共問題専門のネットワークであるのだが、その中には、国会審議の記録があり、まさに映像による「公文書館」としての価値があるわけである。私は、国会関係だけではなくて、広く公共問題情報の映像を記録・保存し、広く国民の利用に供するばかりでなく、教育目的にも使っていこうという、その姿勢に驚いている。もちろん、協力する大学があつての上であるが、パブリック・アフェアーズのテレビを何故作るのか、何故必要なのか、という理念に共感があればこそ実現したものと思われるのである。

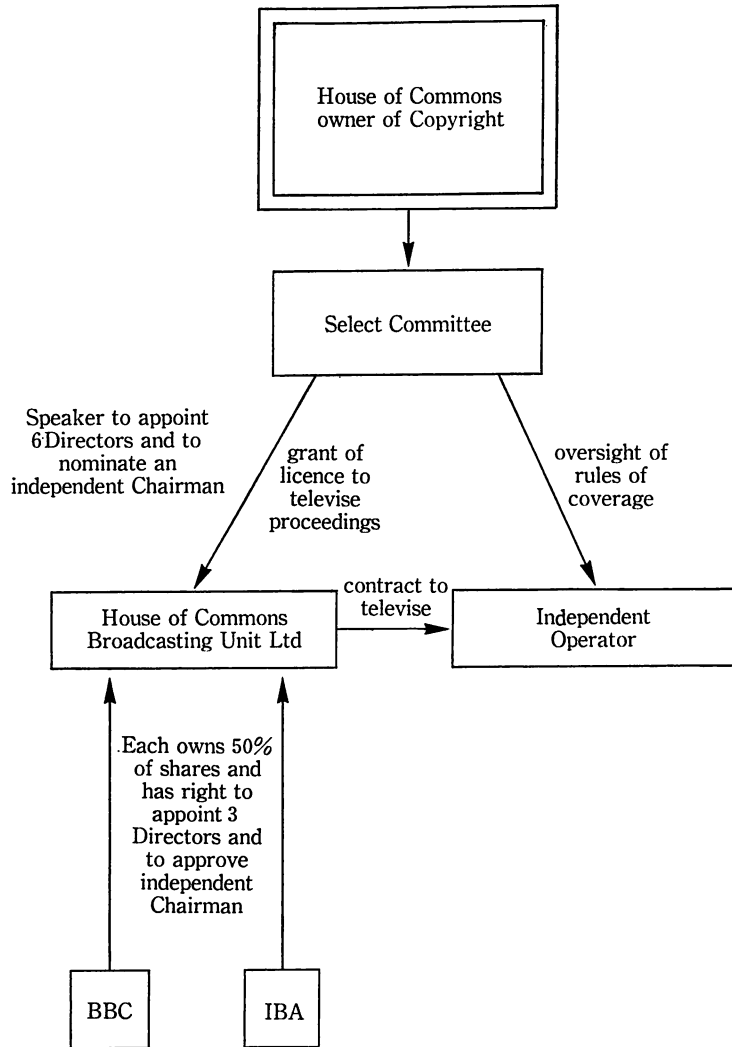
9) 他国への広がり——イギリスの場合

国会にテレビが入ること自体は、多くの国が認めつつあり、今日では59ヶ国で行われている。しかし、C-SPAN のように、常時フルタイムで中継するような試みはアメリカが最初である。わが国においても、「国会テレビジョン」の構築を目指して C-NET という会社が設立されている。イギリスやカナダにも広がりつつあるが、ここではイギリスの場合を見ておくことにしたい。

イギリスでは、1989年6月12日に、下院議会在293対69で議場へのカメラ導入実験について可決した。それは89年11月から9ヶ月間にわたる実験を行うというものであった。賛成の声としては、「議会は、政党が争う舞台である。それは選挙民を教育するための舞台でもある。それが、閉じられた論議の場に制限されるなら、全ては不毛である」「政治から遠ざかり、無関心な人々や、有力者に従属した知的でない人々を教育するという、これ以上の公共的目的があるか」といったものがあり、消極的な意見としては、「選挙区の住民が、議員のテレビ出演を毎日でも期待したり、議場での議員の悪い行動が写されてしまう恐れである」といったものがあるが、こうした意見は、テレビが導入される時、きまってしまう意見のようである。

運用は、先ず議会内に設けられた委員会、Select Committee on Television of Proceedings of the House of Commons の管理の下に、BBC と IBA が半分づつ出資した会社 House of Commons Broadcasting Unit Ltd が設けられ、そこが実務の責任を負い、Independent Operator と制作の契約を交わす（表4を参照）。通信衛星のトランスポンダーの費用は、年間250—350万ポンドで、この費用は、BBC だけでなく、イギリスのあらゆるニュース機関が分けもつことにしている。カメラは、リモートコントロールの出来るカメラ8台が設置される。議長をはさんで、左右に3台づつ、他の2台は、議長と議場を写すために南側の端に、小さいカメラで目立たないように配慮。カメラワークでは、一定の制限が課せられている。話す人のショットを中心にして、他のメンバーの画は取らないようにする。時々、ワイドなアングルショットは認める。名前を言及された人のリアクションは認める。重大な混乱が生じ、継続が困難になるよう

表4 イギリス議会のテレビ中継システム



〔「C-SPAN Update」1989年6月19日号より〕

な場合、ディレクターは議長にのみ焦点を合わせるなどのルールがある。

録画されたテープについては、軽い娯楽番組や風刺プログラムに利用してはいけない、という規則を設けている。アメリカの場合は、テープは政治的宣伝を除いては、どんな形態においても利用することが出来る。実際、コメディ番組にしばしば使われている。

議会をテレビに映し出して、国民に広く開放するということは、なにしろ被写体になる議員達がルールを決めるので、最初は警戒的にならざるをえないのであろうが、やがては、写される側も見る側も、テレビがあって当たり前ということになっていくのではないと思われる²⁴⁾。

10) C-SPAN の特徴

日本には、C-SPAN のようなチャンネルが、未だ存在しないのであるが、アメリカでスタートしたこのようなパブリック・チャンネルが、社会に投げかけた意義はどんなところにあるのか、アメリカの民主主義にどんな影響をもつことになるのか、アメリカ政治の動向に C-SPAN がどんなかわりをもつことになるのか、解明されていかなければならない課題は多い。ここでは、以上の分析を通じて得た C-SPAN の特徴を私なりにまとめておきたいと思う。

1) 議会を国民につなぐ

選挙によって代表を議会に送り、その代表者によって政策が決定されていくのが民主主義であるが、国民の政治への無関心があっては、選挙が形骸化するし、政治家の政策決定プロセスが国民の目から隠されると、政治は腐敗し、民主主義が空洞化し、形骸化する。国民の政治への参加には、なによりも政治情報の提供が不可欠であり、政策決定のプロセスが国民の目に見えるようにすることが求められる。多様なメディアと通信手段が現実化してきている中で、政治の世界だけが取り残されていてよいわけがない。通信衛星とケーブルテレビが政治的にも有効に使われてよいわけで、新しいコミュニケーション手段をどうつかうかは、情報化社会の中にある民主主義のありかたを考えると、避けて通ることが出来ない問題である。議会の審議をいかにして国民に見てもらい、議会と国民の距離を縮めるか、そうした時代の要請を受けて、C-SPAN が登場してきたものと考えることが出来る。

2) パブリック・アフェアーズを取り上げる

議会での討論やスピーチは最もパブリックなものであるが、社会にとっての重要な問題についての討論やスピーチは、毎日の出来事として、どこかで行われている。政党をはじめ、さまざまな政治団体、研究団体、大学、市民団体などで、シンポジウムやフォーラムなどで、公共的な問題が論じられている。それらの一部は、新聞紙上に上げられられたり、テレビニュースとして取り上げられるが、その場合でも、そのごく一部が要約されて伝えられるにすぎない。しかし、C-SPAN では、取り上げたら「初めから終わりまで」、その全貌を伝えるのである。国民がそうした場面を目撃できるということは、国民自身の社会的問題への関与をそれだけ促すことになるものと思われる。

3) 第 1 次情報の提供……「オルターナティブ・ジャーナリズム」

C-SPAN の編成方針が、「初めから終わりまで」「編集なし解説なし」であることは、これまでも触れてきたが、こうした編成方針は一体何を意味するのであろうか。まず、言えることは、これまでのテレビ報道がとってきた方針とは違うということである。今までの放送局が報道する主体として、報道する側が対象を切り取って、編集もし解説もして伝えるというのが当り前で、テレビ・ジャーナリズムと言えば、ジャーナリストが一定の判断をして事実を伝えることを

意味してきた。C-SPANでも、2チャンネルを運用して、24時間放送であっても、時間に制限はあるわけで、何を取り上げるかは、数多くある現実から選ばなければならないということはある。議会の委員会でも、全部の委員会が取り上げられるわけではないのであって、選ばれたものが放送されるわけである。しかし、ひと度取り上げたら、その現実をありのまま、と言ってもカメラが現実を切り取り、ブラウン管の枠を通して見せるという物理的制約からのがれられはしないが、可能な限り、加工を施さずに見せようとするのである。つまり、テレビを通して「目撃」させようとするのである。テレビの生中継というのは、そういう性質をもつものであるが、解説なしで、初めから終わりまで中継するというのは、これまでの中継のあり方とは明らかに違う。送り手によって加工された情報を「2次情報」と言うならば、C-SPANが提供するものは、「1次情報」と言って差し支えなからう。ジャーナリズムという言葉を使うなら、何と云えばよいであろうか。C-SPAN自らの言い方を借りれば、「オルターナティブ(もう一つの)・ジャーナリズム」ということになる。

こうしたオルターナティブ・ジャーナリズムが、登場してくると、これまでの編集をして、解説・説明をしてというジャーナリズムは、その特性を一層自覚し、内容を要約し、意味付けをし、解説・説明をすることに、一層の特徴を発揮していかなければならなくなるだろう。ジャーナリストには、そのことの強い自覚が迫られてくることになる。

4) コール・インの考え方

C-SPANは、視聴者が電話によって政策形成にかかわる重要人物に、直接話しかけることが出来る番組をレギュラーで保障している。重要人物というのは、下院及び上院の議員、政府の高官、専門家などであり、そのほかに、視聴者がジャーナリストに質問が出来る番組も用意されている。コール・インは、番組編成の中で、重要な位置を占めており、視聴者の政治への参加を促すために、必要だという考えなのであろう。視聴者にはさまざまな考え方の人がいるわけで、どんな質問が飛び出すか予測がつかないことを考えると、大胆な試みであると言わなければならない。

アメリカでは、通常、誰かがスピーチをすると、その後、聴衆との間で質疑応答が行われる。スピーチと質疑応答は、セットになっていると考えてよいのではないと思われる程である。つまり、こうしたコミュニケーションの方法が社会的に広く認められ、定着しているからこそ、コール・インの導入が出来たのであろうと思われる。現実には、視聴者からの表現をめぐって、トラブルが発生するということもあるが、国民との直接対話を欠かさないという原則を守っているところに、C-SPANの民主主義に寄与しようとする姿勢を読み取ることが出来る。

5) 視聴率に左右されない

マス・メディアは一般に、オーディエンスの大きさが評価の尺度に使われる。多くの人が読んだから、見たから価値があって、その数が少なかったら失敗である、とされてしまう。いくら公共目的を主張しようとも、経済的に成り立っていくためには、広告にしろ、寄付にしろ視聴者か

らにしろ、お金を集めなければならない。C-SPAN が、ケーブルテレビ産業の支えで、民間事業として経営され、番組の視聴率とは関係なしに運営されていることに注目しておきたい。ケーブルテレビへの加入世帯が増えることは、C-SPAN にとっては、絶対的に大事なことであるが、複数のベーシック・サービスの中に含まれて配信されていることの意味が大きい。そのことのために、視聴率が問われずに済んでいるわけである。

6) グローバリズムの考え方

今日の政治は、外国の政策と無縁に存在することは出来なくなってきており、国民にとっては、自国に関する情報、自国発信の情報だけではなくて、広く外国の情報、異質な情報に接する機会が必要となってきている。C-SPAN が、外国の議会中継を写しだすのも、そうした試みの一つであり、オーディオ・サービスで外国の国際放送を導入しようとするのも、その一貫として捉えることが出来る。

7) 教育に役立てる

C-SPAN が広い意味で、国民に対する政治教育のチャンネルとして機能していることを指摘しておかなければならないと思うが、C-SPAN は特に若い世代に対して、特別の教育計画を持って事に当たっている。「C-SPAN in the classroom」を組織して、C-SPAN の番組を高校、大学における教材として開発するという試みが行われている。教育にどんな貢献をするのか、これからの問題として注目されるのである。将来、C-SPAN を見て、政治家を志す青年が現れるかも知れない。

8) 番組の記録保存

C-SPAN の番組の全てが、Purdue University のなかにある Purdue Video Archives に保存されることになっており、コンピューター管理によって、保存・整理・検索がなされるようになってきている。教育関係者には、特別の便宜をはかるばかりでなく、広く国民の利用にも供していけるように考えられている。

パブリック・アフェアーズのテレビ・ネットワークの構築が、単に放送して終りというのではなく、記録の活用までを視野の中に入れてシステム化していることに、私は驚かざるを得ない。

注)

- 1) 田中良紹『『国会中継専門テレビ局』構想の課題と問題点』『新放送文化』 No. 21, 1991, 28-32頁。
- 2) 「C-SPAN Update」1989年7月10日号。
- 3) 「The U. S. Congress Handbook」1989, 1頁。
- 4) 「C-SPAN Update」1989年6月19日号。
- 5) 「C-SPAN Update」1989年9月11日号。
- 6) 「C-SPAN Update」1990年1月28日号。
- 7) 「シンポジウム・テレビと議会」報告書 1990, (株) C-NET, 3-4頁。
- 8) 「C-SPAN Update」1990年1月28日号。
- 9) Susan Tyler Eastman, Sydney W. Head, Lewis Klein 『Broadcast/Cable Programming』3rd edition, 1989, 294頁。

- 10) 「The U. S. Congress Handbook」1989, 3頁。
- 11) 同上, 3—4頁。
- 12) 「C-SPAN Update」1989年6月19日号。
- 13) 「The U. S. Congress Handbook」1989, 4頁。
- 14) 「C-SPAN Update」1990年1月21日号。
- 15) 同上, 1990年1月14日号。
- 16) 同上, 1990年2月18日号。
- 17) 同上, 1990年1月21日号。
- 18) 同上, 1990年2月4日号。
- 19) 「C-SPAN in the classroom — teacher's guide」1989, The National Cable Satellite Corporation, 2頁。
- 20) 「C-SPAN Update」1989年7月10日号。
- 21) 同上, 1990年1月14日号。
- 22) 「C-SPAN in the classroom — teacher's guide」1989, The National Cable Satellite Corporation, 3—10頁。
- 23) 「C-SPAN Update」1990年1月28日号。
- 24) 同上, 1989年6月19日, 26日号。